

大学生の思いやり行動躊躇と対人関係特性の関連

満野 史子・三浦 香苗

Hesitation in undertaking pro-social behaviors and interpersonal characteristics of students

Fumiko MITSUNO and Kanae MIURA

It was hypothesized that modern youth behave pro-socially by taking the feelings of receivers into consideration. In a pilot study, a questionnaire containing three measures was administered to student participants (n = 306). The measures were: (1) scale of pro-social behavior, which requires student anticipations and their reasons. This scale is composed of four situations, pointing out a friends' mistakes, hearing a friend talks of difficulty, encouraging a worrying friend and comforting a crying friend, (2) The Object Relations Scale and (3) Multi-Dimensional Empathy scale. Results indicated that there were significant differences in the occurrence of the four situations of pro-social behaviors and the reasons that were selected by the participants. In all situations, pro-social behaviors were positively related to personally oriented reasons and empathic interests, but negatively related to worrying about hurting friends and superficiality in interpersonal relationships. These findings suggest that the inclination to hesitate and reasons for pro-social behaviors was compound with the situations in a complex relationship.

Key words : youth (若者), Hesitation to against pro-social behavior (思いやり行動の躊躇), interpersonal characteristic (対人関係特性), worrying about hurting friends (友人傷つけ懸念), superficiality in interpersonal relations (希薄な対人関係)

1. 問題と目的

青年期の友人関係は、個人の適応や精神的健康に強く影響する重要な社会的関係として注目され、その重要性は繰り返し指摘されている(岡田, 2008)。しかし、大平(1995)は現代の青年の特徴として、円滑な対人関係を保つために、あえて相手の気持ちに踏み込まず、葛藤をできるだけ避けることを「やさしさ」とする若者が増えていると指摘している。

青年期においては、お互いを傷つけ合わないよう、表面的に円滑な関係を志向するために、他者の目を気にしたり、人前で過度に緊張するなどの対人恐怖的心性は広く認められるといわれており(永井, 1994)、現代青年の対人関係上のストレスの原因として、良好な関係を維持するための気遣いや、それがうまくできない劣等感も見出されている(橋本, 1997)。このような現代の友人

関係において表面的なつき合いをし、深い付き合いを回避する傾向は、臨床の場だけでなく、現代の一般青年の友人関係の1つの特徴として存在するといえ、近年数多くの研究が行われている(小塩, 2007; 後藤, 2008)。

ところで、こうした対人関係の希薄化の原因の1つとして、「思いやり」の低下が考えられている。中里・松井(1997)は、日本の若者が友人関係で悩むことも増加したと指摘し、その原因として、人間関係をうまくやっていくための技術である「社会的スキル」と、人間関係にとって重要で、社会的スキルよりもっと基本的な特性と述べていた「共感性」が、他の国の若者よりも低いことを示唆している。思いやりが低下したことで、友人関係も希薄になってきているという見解である。そのため、「思いやり」を育む必要性を主張する研究者もいる(平木, 2000)。

日本における「思いやり」の研究は、「向社会

的行動」の研究が基礎になっているものが多く、「向社会的行動」や「愛他行動」と同じ定義が「思いやり」に用いられることが多い（坂井, 2006）。そのため、従来の「思いやり」の研究では、対象者が「思いやり行動」を行うかどうかによって測定されてきた。しかし、日本の研究者の中には「思いやり」とは行動そのものというよりも、「自らの思いを働かせること（平木, 2000）」という心の動きとして捉える研究者もいる。「思いやり」も困っている人を助けるということでは「向社会的」ともいえるが、他者に対する心の動きが重視されていることをふまえると、行動だけでなく、相手を思う情緒的側面も尊重されるべきといえよう。東（1994）は、他者のためになるならば、道徳に反したことであっても思いやりであるとも言えるとも述べている。

以上から、「思いやり行動」は向社会的行動の一部ではあるが、道徳性や規範意識よりも、より情緒を重視した心の動きを伴った行為であるといえるだろう。こうした指摘をふまえて、坂井（2006）は、「他人との気持ちのつながりを強めたり、それをより望ましいものにしようとする場合にとられる行動（菊池, 1998）」としての向社会的行動、すなわち思いやり行動において、「行動に表れない思いやり」の研究の必要性を主張している。他者を思いやった結果、「なにもしない」という思いやり行動も存在する可能性があるためである。例として、「泣いている人を見て、なぐさめるために声をかけるのではなく、ひとりにさせてそっとしておいてあげよう」といった振る舞いが該当すると考えられる。

思いやり行動の生起の過程には、状況の認知（気づき）から始まって、思いやり行動するかどうかの意思決定、実際の行動へという動きが仮定されている（菊池, 1984）。この「気づき」と「意思決定」とを媒介する要因の1つとして、「共感性」があげられている。この「共感性」は、思いやり行動を動機づける重要な個人内要因とされている。この「共感性」の低下が「思いやり行動」の低下の要因の1つと考えられていることは、前に述べた通りである。

「共感性」とは、「他者の体験する感情を見た側に、それと一致した（苦痛に対して、苦痛など）、あるいはそれに対応した感情的反応（苦痛に対して、かわいそう、心配するなど）が起こること」

とされている（登張, 2003）。この共感性が高い人は、目の前で困っている人を見かけたら、自分も困っている人と同じ気持ちになり、その人を助けることが仮定されており（中里・松井, 1997）、「共感性が高い人ほど思いやり行動をする」という関係は、研究の多さからも概ね支持されている。

また、菊池（1998）は、思いやり行動の意図に影響する要因のひとつとして、社会的スキルをあげている。近年の思いやり行動の減少の背景に、この社会的スキルの低下があるという考えもある（菊池, 1998）。しかし、適切なスキルを有していても、自分が行動することが不適切であるという思い込み等、様々な要因で行動につながらないという指摘もあり（遠藤, 2000）、彼はそのような相手を思いやった結果の、何もしないという「行動に表れない思いやり」という行動も含めて、思いやりを検討する必要があると述べている。こうした「行動に表れない思いやり」について、相手を傷つけないように過度に気にする傾向にある現代青年の対人関係においては、行動として表出されなくても「思いやり」であると感じ、またそのような「思いやり」は必要なものである可能性が考えられている（坂井, 2006）。内田・北山（2001）も、従来の研究が扱ってきた思いやり行動について、それらの研究が扱う思いやり行動は、そのような行動の準備状態としての思いやりとしての思いやりの心理状態とは理論的に区別されるべきであると述べている。

これまで既述したように、「向社会的行動」「愛他行動」「援助行動」などは、定義的には近いものであったため、本来の情緒と道徳性、行動などが混在した形で扱われてきたことが示された。本研究においては、本来の情緒的な心の動きを重視した「思いやり」について、登張（2003）の「共感的関心」を『思いやりの気持ち』とする。行動については、「思いやりの気持ち」が伴っている行動を、『思いやり行動』と定義して用いることとする。

これらをふまえて、あえて葛藤場面を避ける現代青年にとって、友人への気遣いが、良好な関係を維持するためのコストとしてストレスの要因になる一方で、良好な関係を築くための要因として考えられるならば、その気遣いが実際にどのようなものなのかを考察することは、現代青年の特徴を捉える上でも意義があると考えられる。

本研究では、「思いやりがあるのに思いやり行動をしない」という「行動に表れない思いやり」に注目し、それが実際にどのようなものなのか、また、青年の対人関係にどのような影響を与えているのかを実証的に把握し、その心理的背景を考察することを目的とする。

2. 予備調査

大学生を対象に、思いやり行動について、本調査で使用する場面と思いやり行動の抑制要因の項目を作成することを目的とする。

2-1. 調査対象

都内の大学生男女121名に調査を依頼し、1場面でも回答があったものを有効回答とした。有効回答が得られたのは66名で（男性42名、女性23名、不明1名、 $M=19.6$ 歳、 $SD=0.92$ ）、有効回答率は54.5%であった。

2-2. 調査内容

- (1) フェイスシート（年齢・学年・学科・性別）。
- (2) 親密な同性の友人を思いやる気持ちから、あえて行動に移さなかった経験を2場面想起してもらい、①その時の状況、②あえてしなかった行動、③その理由、④行動しなかったことへの納得

度（5件法）と理由を尋ねた。

(3) 初対面の人を思いやる気持ちから、あえて行動に移さなかった経験について、相手の人物の特性と、上記(2)と同一内容の質問をした。

2-3. 結果と考察

親密な同性の友人に対して、あえて思いやり行動しなかった場面と理由について、それぞれKJ法に準じた手法により、筆者が単独で分類を行った。その結果をTable 1, 2に示す。

親密な同性の友人条件で男女共通して得られた場面は「指摘場面」「励まし場面」「なぐさめ場面」「相談場面」であった。

また、あえて思いやり行動しない理由については、親密な同性の友人条件において「傷つけ懸念」「自力解決」「自己本位」「場尊重」「面倒」の5パターンの理由が得られた。「傷つけ懸念」は、近年友人関係上で指摘されている「お互いに傷つけ合わないという配慮」に該当すると考えられる。「自力解決」は相手のことを配慮しての理由と考えられるが、「場尊重」は、近年流行語としても用いられた「KY（空気読めない）」に代表されるような、相手の気持ちを察し、その場にふさわしい行動をとること（内藤，2004）を意識するという暗黙知を重視する風潮が反映されていると考えられる。また、思いやり行動の抑制要因として、「責

Table 1 親密な同性の友人に対してあえて思いやり行動しなかった場面

場面	回答数
友人が間違いをしているのに気づいた時、指摘しなかった(指摘場面)	8 (17.4)
友人が何かに失敗し、落ちこんでいた時、励まされなかった(励まし場面)	8 (17.4)
友人が泣いていた時、なぐさめなかった(なぐさめ場面)	4 (8.4)
友人が悩んでいた時、その悩みを聞かなかった(相談場面)	2 (4.3)
その他(14場面)	24 (52.2)
合計	46 (100.0)

カッコ内の数値は回答率(%)

Table 2 あえて思いやり行動しなかった理由

理由	友人条件回答数	初対面条件回答数
相手が余計傷つきそうだったから(傷つけ懸念)	15 (34.1)	6 (30.0)
自分ならそうしてほしいと思ったから(自己本位)	13 (29.5)	-
自分で解決した方が、相手のためになると思ったから(自力解決)	7 (15.9)	-
その場の雰囲気が気まづくなりそうだったから(場尊重)	6 (13.6)	6 (30.0)
面倒だったから(面倒)	3 (6.8)	1 (10.0)
上手な対応が分からなかったから(スキル不足)	-	6 (30.0)
合計	44 (100.0)	20 (100.0)

カッコ内の数値は回答率(%)

任の分散」や「傍観者効果」(Latané & Darley, 1977)も推察される。「面倒」は、まさに思いやりのなさの現れであると思われる。

また、初対面の人条件において、「傷つけ懸念」「面倒」「場尊重」の他に、「上手な対応が分からなかったから」という「スキル不足」の4パターンが得られた。「スキル不足」は従来の研究で指摘されている社会的スキル不足が原因だと考えられる。

「傷つけ懸念・場尊重」は、葛藤をできるだけ避けることを「やさしさ」とする大平(1995)の指摘も当てはまると考えられる。「面倒」「スキル不足」は、全体で15.6%の回答率であり、従来の思いやりの低下の要因が関係していると考えられるが、全体の割合から見ると、思いやりの気持ちからあえて思いやり行動をしなかったという主旨にそった回答が多かったと考えられる。

2-4. 本調査で使用する項目作成

友人関係に焦点を当てるため、思いやり行動をする相手として想起してもらうのは友人のみとした。思いやり行動する状況とそこでの行動は、「友人が間違いをしているのに気づいた時、その間違いを指摘する」「友人が何かに失敗し、落ちこんでいた時、励ます」「友人が泣いていた時、なぐさめる」「友人が悩んでいた時、その悩みを聞く」の4場面を用いることとする。

あえて思いやり行動をしなかった理由は、「友人が余計傷つきそうだったから」、「自分ならそうしてほしいと思ったから」、「友人が自分で解決した方が、友人のためになると思ったから」、「その場の雰囲気気まずくなりそうだったから」、「面倒だったから」に加え、初対面の人条件で得られた「上手な対応が分からなかったから」、そして、先行研究で思いやり行動を抑制する要因として指摘されていた「自分が行動することが不適切であるという思い込み(遠藤, 2000)」といった他者の存在についての項目として、「自分以外に、他に誰か思いやり行動をするのにふさわしい人がいる」を加えた7項目を用いて調査を行うこととした。

上記の4場面と、行動理由の7項目を本調査で使用することとする。

3. 本調査

予備調査で得られた4場面ごとに、行動予想の男女差、およびその行動予想が現代青年の対人関係上の適応感・心理的背景にどのような影響を与えているのか検討し、行動予想の理由についても考察を行う。

3-1. 調査対象

都内の大学生306名(男子106名、女子200名、 $M=19.4$ 歳、 $SD=1.06$)を対象に、2008年10月に質問紙調査を実施した。有効回答率は84.2%であった。

3-2. 調査内容

(1) フェイスシート(年齢・学年・学科・性別)。

(2) 思いやり場面での行動予想:「①指摘場面」「②相談場面」「③励まし場面」「④なぐさめ場面」において、思いやり行動をする程度を「1. 全くしないだろう」～「7. 必ずするだろう」の7件法でたずねた。本研究では、これを「行動予想」とした。

(3) 思いやり場面での行動理由:友人に対してあえて思いやり行動をしない理由として、「①傷つけ懸念」「②自力解決」「③自己本位」「④場尊重」「⑤面倒」「⑥スキル不足」「⑦他者の存在」を、調査対象者が思いやり行動をとる時にどの程度思うか「1. 全くそう思わない」～「7. 全くそうだと思う」の7件法で尋ねた。本研究では、これを「行動理由」とする。

(4) 青年期用対象関係尺度:井梅・平井・青木・馬場(2006)の青年期用対象関係尺度の29項目について、「1. 全くそう思わない」～「6. とてもそう思う」の6件法で尋ねた。この尺度は、調査対象者の対人関係の持ち方のパターンと、それを適応的・不適応的の軸で考えることができるものである。何点以上なら心理的援助が必要かといった判定基準はなく、一般青年が自分の対人パターンを見直すといった自己理解を深めるものとして使用することが期待されている。この尺度は5つの下位尺度からなっている。「親和不全(6項目)」は対人的なやり取りにおいて自ら壁を作り、緊張して打ち解けられない傾向や、深くつきあうことを恐れる傾向のことで、「希薄な対人関係(5項目)」は実質的な中身を伴う対人交流が

Table 3 性別と場面の2要因混合計画の分散分析結果

	全体	男性	女性	多重比較
①指摘場面	5.21(1.11)	5.15(1.31)	5.24(0.99)	①<②③④***
②相談場面	5.92(1.02)	5.67(1.15)	6.06(0.91)	②>①***、②>④*
③励まし場面	5.77(1.03)	5.57(1.17)	5.88(0.93)	③>①***
④なぐさめ場面	5.71(1.24)	5.38(1.49)	5.88(1.05)	④>①***、④<②*

()内の数値はSD, * $p < .05$, *** $p < .001$

できず、相互理解やサポートの授受などが希薄な傾向のことである。「自己中心的な他者操作（5項目）」は、自分のために他者が動くことを当然と考え、また自分の欲求を実現するために他者を操作的に利用しようとする傾向であり、「一体性の過剰希求（6項目）」は他者との心理的距離が過度に近く、自分の要求や行動が100%共有されるはずだと思い、またそれを相手に求める傾向である。「見捨てられ不安（7項目）」は、親しい人から拒絶され取り残されることに対する恐れや、相手の反応に過敏な傾向である。

(5) 青年期用多次元の共感性尺度:登張 (2003)の青年期用多次元の共感性尺度の28項目について、「1. あてはまらない」～「5. あてはまる」の5件法で尋ねた。この尺度は4つの下位尺度からなっている。「共感的関心 (13項目)」は他者の不運な感情体験に対し、自分も同じような気持ちになり、他者の状況に対応した、他者志向の温かい気持ちを持つことを扱っている。「個人的苦痛 (6項目)」は、他者の苦痛に対して、不安や苦痛等、他者に向かわない自己中心の感情的反応をする傾向のことである。「ファンタジー (4項目)」は小説や映画などに登場する架空の他者に感情移入することを意味し、「気持ちの想像 (5項目)」は他者の気持ちや状況を想像する傾向のことである。

3-3. 結果

3-3-1. 性別×4場面の2要因混合計画の分散分析

性別と場面によって、行動予想に差があるか検討するため、性別(被験者間)×4場面(被験者内)の2要因混合計画の分散分析を行った (Table 3)。

その結果、性別と場面の交互作用は見られなかった ($F(2.84, 807.20) = 2.49, n.s.$)。性別の主効果は有意であり ($F(1, 284) = 11.16, p < .01$)、女性が男性よりも行動予想が有意に高いことが示された。また、場面においても主効果が有意であったため ($F(2.84, 807.20) = 27.60, p < .001$)、

Bonferroniの多重比較を行った。その結果についても Table 3 に示す。指摘場面は、他の場面よりも行動予想が低くなる結果となり、なぐさめ場面は相談場面よりも行動予想が低くなることが示され、場面によって、行動予想に差が見られることが明らかとなった。

3-3-2. 行動予想に影響する理由の検討

行動予想に影響する行動理由が異なるか検討するため、全体と男女別に行動予想を従属変数、行動理由を独立変数にした重回帰分析(ステップワイズ法、投入するFの確率 $\leq .05$ 、除去するFの確率 $\geq .10$ を基準とした)を行った (Table 4)。

その結果、場面全体では、「自己本位」($\beta = .43, p < .001$)は行動予想に有意な正の関連を示し、「傷つけ懸念」($\beta = -.26, p < .001$)は有意な負の関連を示した。また、女性において「スキル不足」($\beta = -.20, p < .01$)が有意に負の関連を示した。

指摘場面では、全体で「自己本位」($\beta = .25, p < .001$)が有意な正の関連を示した。男性では「スキル不足」($\beta = -.21, p < .05$)、女性においても「スキル不足」($\beta = -.28, p < .001$)が有意に負の関連を示した。

相談場面では、全体で「自己本位」($\beta = .32, p < .001$)が有意な正の関連を示した。男性において「面倒」($\beta = .39, p < .001$)、「傷つけ懸念」($\beta = -.21, p < .05$)が有意に負の関連を示した。女性では「スキル不足」($\beta = -.25, p < .01$)が有意に負の関連を示した。

励まし場面では、全体で「自己本位」($\beta = .44, p < .001$)が有意な正の関連を示し、「傷つけ懸念」($\beta = -.21, p < .001$)が有意に負の関連を示した。

なぐさめ場面では、全体で「自己本位」($\beta = .38, p < .001$)が有意な正の関連を示し、「傷つけ懸念」($\beta = -.42, p < .001$)が有意に負の関連を示した。

全ての場面で「場尊重」が投入されず、場面によって行動予想に影響する理由に差異がみられる

Table 4 行動予想と行動理由の重回帰分析結果

		指摘場面	相談場面	励まし場面	なぐさめ場面	場面全体平均
傷つけ懸念	全体	-0.13 *	-0.12 *	-0.21 ***	-0.42 ***	-0.26 ***
	男性	-	-0.21 *	-0.28 **	-0.48 ***	-0.36 ***
	女性	-	-	-0.24 ***	-0.37 ***	-0.16 *
自己解決	全体	0.12 *	-	-	-	-
	男性	-	-	-	-	-
	女性	-	-	-	-	-
自己本位	全体	0.25 ***	0.32 ***	0.44 ***	0.38 ***	0.43 ***
	男性	0.34 ***	0.26 **	0.46 ***	0.36 ***	0.46 ***
	女性	0.24 **	0.37 ***	0.49 ***	0.39 ***	0.42 ***
場尊重	全体	-	-	-	-	-
	男性	-	-	-	-	-
	女性	-	-	-	-	-
面倒	全体	-0.13 *	-0.18 **	-0.15 **	-	-0.16 **
	男性	-	-0.39 ***	-	-	-
	女性	-0.16 *	-	-	-	-0.13 *
スキル不足	全体	-0.14 *	-0.15 **	-	-	-
	男性	-0.21 *	-	-	-	-
	女性	-0.28 ***	-0.22 **	-	-	-0.20 **
他者存在	全体	-0.12 *	-0.13 *	-	-	-
	男性	-	-	-	-	-
	女性	-	-0.25 **	-	-	-
R ²	全体	0.24 ***	0.35 ***	0.39 ***	0.41 ***	0.41 ***
	男性	0.17 ***	0.36 ***	0.35 ***	0.41 ***	0.38 ***
	女性	0.22 ***	0.36 ***	0.39 ***	0.38 ***	0.45 ***

数値は標準偏回帰係数(β), * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

結果となった。

3-3-3. 青年期用対象関係尺度の因子分析・信頼性分析

青年期用対象関係尺度の使用マニュアルでは、項目の順番は変えずに施行することが奨励されていたが、本研究では質問紙の構成上、そのマニュアルに示されていた項目順に調査を実施しなかった。そのため、29項目全てで天井効果とフロア効果が見られないことを確認してから、因子構造を確認するため、井梅ら(2006)と同様に、プロマックス回転(最尤法、5因子指定)の因子分析を行った(Table 5)。その結果、全ての項目が.35以上の因子負荷を示したが、井梅ら(2006)と同様の因子構造は得られなかった。

信頼性を検討するため、井梅ら(2006)の下位尺度項目を用いて各因子間の相関と、Cronbachの α 係数を算出した(Table 6)。その結果、「親和不全」と「希薄な対人関係」は $r = .64$ ($p < .001$)、「親和不全」と「見捨てられ不安」は $r = .55$ ($p < .001$)、「一体性の過剰希求」と「見捨てられ不

安」は $r = .46$ ($p < .001$)で有意に高い相関が示されたが、これらは井梅ら(2006)の報告とほぼ一致する。Cronbachの α 係数についても、井梅ら(2006)のものと同様の結果が得られ、どの因子においてもある程度内の一貫性が得られたため、井梅ら(2006)と同じ構造の下位尺度を用いて以下の分析に使用することとした。

3-3-4. 対人関係特性が行動予想に与える影響

対人関係特性が思いやり場面における行動予想にどのような影響を与えているのか検討するため、男女別に行動予想を従属変数、対象関係尺度、共感性尺度の各下位尺度を独立変数にした重回帰分析(ステップワイズ法、投入するFの確率 $\leq .05$ 、除去するFの確率 $\geq .10$ を基準とした)を行った(Table 7)。

その結果、場面全体では、「共感的関心」($\beta = .45$, $p < .01$)は行動予想に有意な正の関連を示し、「希薄な対人関係」($\beta = -.26$, $p < .001$)は有意な負の関連を示した。また、女性において「スキル不足」($\beta = -.31$, $p < .001$)が有意に負の関連を示した。

Table 5 青年期用対象関係尺度の因子分析結果（最尤法、プロマックス回転）

項目内容(*は逆転項目)	I	II	III	IV	V
私は人となかなか親しくなれない	.78	.30	.01	.00	.29
私は、人とどうやって会ったり話していいのかわからない	.75	.48	.00	-.02	.28
人のそばにいと、緊張して落ち着かないことが多い	.68	.36	.10	.06	.30
私は自分の心に壁を作ってしまう、周りをよせつけないことがある	.67	.38	-.09	.26	.18
私は他者と深くつき合うことを恐れている	.65	.27	.04	.18	.39
友人関係は比較的安定している*	.62	.19	-.08	.02	.35
私は人間関係を大事にしており、それによって多くのものを得ている*	.60	-.10	.12	.10	.48
私には、親しい相手との関係を、自分から切ってしまうところがある	.43	.14	-.02	.24	.39
私は親しい人（家族や恋人、親友など）に自分の要求を適切に伝えることができる*	.38	.18	-.06	-.10	.31
何かにつけて置いてきぼりにされそうで、よく心配になる	.29	.70	.19	.06	.05
私は他人からの否定的な態度・素振りにひどく敏感で傷つきやすい	.35	.64	.20	-.06	.03
私は人と接する時、人の顔色をととても気にする	.34	.62	.12	.06	-.02
ひょっとして大切な人から拒絶されるのでは、という恐れをいだくことがある	.40	.58	-.01	.22	.11
私は常に誰かと一緒にいないと不安である	.04	.57	.48	.23	.00
とても親しい相手であっても、いつか裏切られるのではという不安を感じることもある	.45	.50	.11	.27	.27
親しい人とは、何をしても一緒に行動をしないと気がすまない	.02	.50	.44	.15	-.13
親しい人に自分の考えを否定されるとひどく傷つく	.13	.47	.27	.00	.04
身近な人が私以外のものに気をとられたら、拒絶された感じがして傷つく	.32	.44	.38	.11	.10
私を本当に想ってくれる人なら、私の要求をすべて受け入れてくれるはずである	-.01	.21	.82	.28	-.01
私は完全に一心同体になれる人を求めている	.14	.39	.65	.06	-.14
母親なら、私の望みをかなえてくれて当然だ	.05	.21	.54	.19	.06
親しい人には、自分を“100%”受け入れてもらいたい	-.19	.37	.51	.00	-.31
人を思い通り動かすのは、私のひそかな楽しみである	.02	.09	.10	.74	-.02
私には、欲求を満たそうとして、自分の思い通りになるように相手を仕向けるところがある	.03	.13	.14	.72	.02
自分の欲望を満たすために、人を利用することは悪いことではないと思う	.14	.02	.17	.57	.27
人との関係で私が重点を置くことは、常に相手より優位な立場になることである	.09	.13	.31	.52	.21
自分が思うとおりに人の気持ちを仕向けていくことが、人とのつきあいで重要なことである	-.05	-.08	.35	.41	.03
私には、本当に困ったとき、助けてくれると思える人がいる*	.51	.05	-.06	.07	.82
本当の自分を理解してくれると思える人がいる*	.52	.14	-.11	.18	.72
	因子間相関				
	I	II	III	IV	V
I	-	.37	-.03	.11	.47
II		-	.27	.12	-.03
III			-	.20	-.04
IV				-	.17

Table 6 青年期用対象関係尺度の因子間相関とα係数

	I 親和不全	II 関係希薄	III 自己中心	IV 一体希求	V 見捨て不安
親和不全	-	.64 ***	.11	.09	.55 ***
関係希薄		-	.04	-.09	.27 ***
自己中心			-	.26 ***	.11
一体希求				-	.46 ***
α	.83	.75	.73	.78	.78

*** $p < .001$

指摘場面では、全体で「見捨てられ不安」($\beta = -.20, p < .01$)が有意な負の関連を示した。男性では「希薄な対人関係」($\beta = -.30, p < .01$)が有意な負の関連を示した。女性では「共感的関心」($\beta = .27, p < .01$)が有意に正の関連を、「見捨てられ不安」($\beta = -.35, p < .001$)が有意に負の関連を示した。

相談場面では、全体で「共感的関心」($\beta = .32, p < .001$)が有意な正の関連を示し、「親和不全」($\beta = -.27, p < .001$)が有意に負の関連を示した。女性では「個人的苦痛」($\beta = -.28, p < .001$)が有意に負の関連を示した。

励まし場面では、全体で「共感的関心」($\beta = .41, p < .001$)が有意な正の関連を示し、「希薄な対人関係」($\beta = -.19, p < .001$)が有意に負の関連を示した。

なぐさめ場面では、全体で「共感的関心」($\beta = .37, p < .001$)が有意な正の関連を示した。

3-4. 考 察

3-4-1. 行動予想の性差と場面差

行動予想について、全場面の評定平均値が5.65(0.79)と高く示されたのは、社会的望ましさも影響したと考えられる。女性の方が男性よりも、

Table 7 行動予想と各対人関係特性との重回帰分析結果

		指摘場面	相談場面	励まし場面	なぐさめ場面	場面全体平均
親和不全	全体	-	-0.27 ^{***}	-	-	-
	男性	-	-0.22 [*]	-	-	-
	女性	-	-0.37 ^{***}	-	-	-
関係希薄	全体	-0.14 [*]	-	-0.19 ^{**}	-0.16 ^{**}	-0.31 ^{***}
	男性	-0.30 ^{**}	-	-0.24 [*]	-	-0.25 ^{**}
	女性	-	-	-0.15 [*]	-0.23 ^{**}	-0.33 ^{***}
自己中心	全体	-	-	-	-	-
	男性	-	-	-	-	-
	女性	-	-	-	-	-
一体希求	全体	-	-	-	-	-
	男性	-	-	-	-	-
	女性	-	-	-	-	-
見捨不安	全体	-0.20 ^{**}	-	-	-	-
	男性	-	-	-	-	-
	女性	-0.35 ^{***}	0.19 [*]	-	-	-
共感的関心	全体	0.17 [*]	0.32 ^{***}	0.41 ^{***}	0.37 ^{***}	0.45 ^{**}
	男性	-	0.44 ^{***}	0.29 ^{**}	0.44 ^{***}	0.37 ^{***}
	女性	0.27 ^{**}	-	0.45 ^{***}	0.37 ^{***}	0.31 ^{***}
気持ち想像	全体	-	-	-0.13 [*]	-	-
	男性	-	-	-	-	-
	女性	-	-	-0.18 ^{**}	-0.15 [*]	-
ファンタジー	全体	-	-	-	-	-
	男性	-	-	-	-	-
	女性	-	0.18 [*]	-	-	-
個人的苦痛	全体	-	-	-	-	-
	男性	-	-	-	-	-
	女性	-	-0.28 ^{***}	-	-	-0.18 ^{**}
R^2	全体	0.11 ^{***}	0.21 ^{***}	0.22 ^{***}	0.21 ^{***}	0.32 ^{***}
	男性	0.09 ^{**}	0.27 ^{***}	0.20 ^{***}	0.19 ^{***}	0.34 ^{***}
	女性	0.16 ^{***}	0.22 ^{***}	0.22 ^{***}	0.21 ^{***}	0.30 ^{***}

思いやり行動をとろうとする予想が有意に高い傾向にあることが明らかとなったが、これは女性の方が男性よりも共感性が高く（登張，2003）、共感性は思いやり行動の生起要因の1つと仮定されているため、行動予想にもつながりやすかったと考えられる。

場面の性質を考察すると、指摘場面は、友人に対して自分から間違いを指摘することで、友人に問題に気づかせる場面である。他の3場面は、友人ははじめから何か悩んだり、落ち込んだり、泣いていたり問題があることがうかがえ、それをどのように支援するかが課題とされる場面である。指摘場面で行動予想が最も抑制されるのは、どのようにうまく問題を指摘すれば、相手が傷つかずにすむのか懸念してしまう結果の表れであると考えられる。

3-4-2. 行動予想に影響する理由の検討

場面全体では、「自己本位」は行動予想の促進要因、「傷つけ懸念」は抑制要因となる結果が示された。抑制要因として考えていた「自己本位」が全ての場面で促進要因として得られたのは、予備調査時には「しない」ことを前提に調査を行ったが、本調査では「する・しない」で調査を行ったため、尋ねた理由が抑制要因にも促進要因にもなりえた可能性も考えられる。行動予想が全体的に高い傾向にあったことも影響していると考えられるが、同じ「自己本位」でも、「自分がそうしてもらえたら嬉しいから、友人もそうしてもらえたら嬉しいと思うだろう」という友人に対する他者志向的な共感と、「自分自身がそうしてもらえたら嬉しいから行動する」という自己志向的な面が現れた結果であるとも推察される。また、全ての場面において、「場尊重」が投入されなかったのは、実際の友人に対して思いやり行動をとる場面では、全ての場面で「傷つけ懸念」が投入され

たことから、場の空気よりも、友人自身の心情がどのようなものか気遣うことが想起された現れであると考えられる。

指摘場面においては「スキル不足」が男女ともに負の関連を示した。思いやり行動場面において、「上手な対応が分からない」と思うことが行動予想につながる理由としてあげられたのは、坂井（2006）などが指摘していた「思いやりが高くてもタイミングなどが分からずに行動できないという可能性」が示された結果であると考えられる。

相談場面では男性で「面倒」「傷つけ懸念」、女性では「スキル不足」「他者の存在」が負の関連を示した。男性において、「面倒」と思うことが行動予想に繋がらないことは当然の結果と考えられるが、それは悩みを聞くことが受け手の心理的負担になるためだと考えられる。女性において、友人の悩みを聞けない背景には、どのように言葉がけをすればよいのか分からないことと、友人の悩みを解決するために、よりよい誰か他の人の存在を意識することが明らかとなった。友人の悩みを聞くことに対する自信のなさが推察される。

励まし場面では、男女ともに「傷つけ懸念」が負の影響を示した。「相手を傷つけてしまうかもしれないから行動しない」という心配が、思いやりの一部であることが示されたと考えられる。

なぐさめ場面では、男女ともに「傷つけ懸念」が他の場面よりも強い負の関連を示した。これは、既に泣くという傷つき体験をしている友人を目の当たりにし、相手の情緒面までには踏み込まないでおいた方が無難であるという状況理解からの結果であると思われる。

3-4-3. 青年期用対象関係尺度について

井梅ら（2006）と同様の因子構造は得られなかった。各下位尺度の内的一貫性は確認されたが、井梅ら（2006）も因子間相関が高いことによる不安定さは懸念を残しており、また、調査対象者が1041名であり、本研究では313名であったため、人数が少ないことなども影響したと考えられる。使用に際し、内的一貫性は確認されたため、そのまま用いることにした。

3-4-4. 対人関係特性が行動予想に与える影響

場面全体では、「共感的関心」が行動予想の促進要因、「希薄な対人関係」が抑制要因となる結

果が示された。「共感的関心」が思いやり行動の促進要因となることはすでに記述した通りである。「希薄な対人関係」と負の関連があったことは、思いやり行動が対人関係を円滑にする要因の1つであるため、思いやり行動が行われないことで対人関係が深まらないという悪循環が考えられる。また、全ての場面で「自己中心的な他者操作」と「一体性の過剰希求」が投入されなかったが、本研究で扱っている思いやり行動は、他者志向的なものであるため、両者の特性は概念的にも無関係であることがうかがえた。

指摘場面において、男性では「希薄な対人関係」、女性では「見捨てられ不安」が行動予想に負の関連を示し、女性で「共感的関心」が正の関連を示した。相手の間違いを指摘するという場面において、そのことで相手がどのように思うか、特に女性は共感的に考えるが、一方でそのことで相手に嫌がられたりはしないかという不安を抱えていることが明らかとなった。間違いを指摘することは、本来相手のためになる行動であると考えられるが、相手の反応を過剰に気にする傾向は、現代青年が相手に気遣うことで対人摩擦を起こしているという主張が、本研究においてもみられたと考えられる。

相談場面では、男女ともに「親和不全」と、女性のみ「個人的苦痛」が負の関連を示していた。対人的なやり取りにおいて自ら壁を作り、緊張して打ち解けられない傾向や、深くつきあうことを恐れる傾向がこの場面でのみ投入されたのは、他の場面と比べて、友人が何かに困っているようではあるが、どのような問題を抱えているのか具体的にはまだ分かっていない状況で、相手に1歩踏み込まないことでそのような傾向が更に深まっていくということが推察される。

励まし場面となぐさめ場面は、両者ともに同様の結果が得られた。相手の問題が既に明白であるこの場面において、実質的な中身を伴う対人交流ができず、相互理解やサポートの授受などが希薄な傾向が強いと、行動予想につながりにくいようである。個人の対人関係特性として、対人関係が希薄な人は、全体的に見ても思いやり行動という他者との関わりがしにくい傾向にあるようである。元々の特性でもあるが、行動をとらないことにより、さらに希薄になっていくことがうかがえた。

4. まとめと今後の課題

本研究においては、「指摘場面」「相談場面」「励まし場面」「なぐさめ場面」の4場面を研究対象として用いた。これらの場面について、行動予想に差異が見られたため、思いやり行動の予想には、状況要因が大きく関わっていることが、改めて示された。また、行動予想の背景となる対人関係上の適応感や理由にも、場面ごとに差異が見られたことを考慮すると、以下のことが考えられる。

指摘場面は、友人がまだ自身の間違いに気づいていないことから、スキル不足や自分から友人の間違いを指摘することへの友人からの反応に対する不安といった個人の特性に行動予想が左右されることが考えられた。

相談場面は、悩んでいる友人の存在に気付き、悩みを聞くことで、これからそれを共有しようとする場面であると考えられる。特に男性において「面倒」と思われるのは、これからどのような相談がされるのか不明瞭なため、自身の心理的負担をコストとして考慮するという現代青年の特徴の一端が現れたものだと考えられる。悩みを聞くという行動予想に繋がらないため、結果的に対人的なやり取りにおいて自ら壁を作ることになり、緊張して打ち解けられない傾向や、深くつきあうことを恐れる傾向が強まるものと推察される。

励まし場面となぐさめ場面は、友人がすでに落ち込んでおり、自分の行動次第では状況がより悪化する場面であったと考えられる。友人の落ち込みに温かい気持ちを持ちながら共感し、「自分なら励ましてもらいたい」と思うことが行動予想に繋がることが明らかになった一方、悪化を懸念したり、実質的な中身を伴う対人交流ができず、相互理解やサポートの授受などが希薄な傾向が行動予想の抑制にも繋がりがやすいことが示唆された。この2つの場面は、より相手の情緒に踏み込む場面であるとも考えられるため、そのような関わりを回避することで、相互理解やサポートの授受などが深まらないという悪循環が考えられた。

従来の思いやり研究において、思いやり行動の抑制要因は、大きく分けて「思いやりの気持ちの低下」と「社会的スキルの低下」とされ、両者ともに行動に示されないため、「思いやりが低い」とされてきた。本研究においては、「傷つけ懸念」が抑制要因となることが示されたため、「相手を

傷つけないために、思いやり行動を示さない」という思いやりが存在することが示され、状況によってその抑制要因も異なる可能性が示唆された。しかし、抑制要因も思いやりの気持ちが伴っているものと、そうでないものが混在する結果となったため、思いやり行動の抑制要因が、相手を思いやった結果なのか、スキル不足や無関心に由来するものなのか、今後さらに精査していく必要があるだろう。

思いやり行動はリスクを伴う行動でもあるため、状況によって行動しないことで親和不全が伴うのは当然の結果とも考えられる。「思いやりの気持ちから行動しない」という行動様式は、思いやり行動が必要とされる場面におけるひとつの行動タイプとして、現代青年にとっては必要な場合があることが考えられた。しかし、共感的関心が思いやり行動の促進要因となることが、本研究においても示されたため、相手について自分の心を動かすことの重要性は、さらに深められたといえよう。

本研究の結果から、対人関係に一步踏み込めないことへの援助について考えてみたい。他者と絆を深める要因として、まず他者に対して心を動かすことが求められることが明らかとなった。そのため、対人関係を深められないことについて、まずは実際に深める準備段階としての「気持ち」として、自己認知も重要であるが、自身の気持ちが他者に向かっているかどうかという、他者への認知の仕方について、特徴をつかむことも重要であると考えられる。その上で、状況や社会的スキルなどの行動面を問題にすることが、援助のあり方の1つとして考えられる。

今後この研究を深める際には、本研究においては予備調査で得られた「場尊重」が時代の風潮によって出現した要因であったと考えられたため、その時代背景について、全体的に考察することは重要であると思われる。そして、本調査では初対面の人について扱わなかったが、予備調査で初対面の人に対してあえて思いやり行動しなかった場面を尋ねた際の自由記述において、「大学で隣に座った人が親しげにした時に、メールアドレスをこちらから聞かなかった」という記述が見られた。今ある友人関係の深化だけでなく、あらたな友人関係を築ききっかけとなるような場面においても、「思いやり」が必要であるという1つの示唆である。この事例については、思いやりがコストとし

て想定されたことも考えられるが、どちらにしても、相手に「心を動かすこと」は対人関係上必要であると考えられるため、そのような関係を作る初期段階についての研究、また、思いやり行動をされた際、どのような行動が「おせっかい」と過剰に受け止められ、対人関係に影響を与えるのかについても、青年の対人関係の特徴を理解する上で、今後検討していく必要があると考えられる。

引用文献

- 東 洋 (1994). 日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて 東京大学出版会.
- 遠藤利彦 (2000). 思いやりの「ある・なし」とはどういうことか：気持ちと行動の不一致 児童心理, **54**, 743-748.
- 後藤宗理 (2008). 思春期・青年期を中心とした研究の動向 教育心理学年報, **47**, 61-70.
- 橋本 剛 (1997). 大学生における対人ストレスイベント分類の試み 社会心理学研究, **13**, 64-75.
- 平木典子 (2000). 思いやりを育む 児童心理, **54**, 721-730.
- 井梅由美子・平井洋子・青木紀久代・馬場禮子 (2006). 日本における青年期用対象関係尺度の開発 パーソナリティ研究, **14**, 181-193.
- 菊池章夫 (1984). 向社会的行動の発達 教育心理学年報, **23**, 118-127.
- 菊池章夫 (1998). また／思いやりを科学する：向社会的行動の心理スキル 川島書店.
- Latané, B., & Darley, J. M. (1977). 冷淡な傍観者：思いやりの社会心理学 (竹村研一・杉崎和子, 訳). ブレーン出版. (Latané, B., & Darley, J. M. (1970). *The unresponsive bystander: Why doesn't he help?*, Appleton-Century-Crofts.)
- 岡田 涼 (2008). 親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルの構築 教育心理学研究, **56**, 575-588.
- 大平 健 (1995). やさしさの精神病理 岩波新書.
- 小塩真司 (2007). 思春期・青年期を中心とした研究の動向 教育心理学年報, **46**, 55-63.
- 永井 徹 (1994). 対人恐怖の心理：対人関係の悩みの分析 サイエンス社.
- 内藤誼人 (2004). 「場の空気」を読む技術 サンマーク出版.
- 中里至正・松井 洋 (1997). 異質な日本の若者たち：世界の中高生の思いやり意識 ブレーン出版.
- 坂井玲奈 (2006). 思いやりに関する研究の概観と展望：行動に表れない思いやりに注目する必要性の提唱 東京大学大学院教育学研究科紀要, **45**, 143-148.
- 登張真穂 (2003). 青年期の共感性の発達：多次元的視点による検討 発達心理学研究, **14**, 136-148.
- 内田由紀子・北山 忍 (2001). 思いやり尺度の作成と妥当性の検討 心理学研究, **72**, 275-282.

謝 辞

本稿は、修士論文として提出されたものを、修正・加筆したものです。修士論文執筆にあたり、貴重なご助言ならびにご意見をいただきました、今城周造教授に謹んでお礼申し上げます。そして調査にあたり、ご協力いただきました先生方・学生の皆様に、心より感謝申し上げます。

(みつの ふみこ 昭和女子大学生生活心理研究所)

(みうら かなえ 昭和女子大学人間社会学部心理学科)